

華

沈 醉

新

代一這們我於裂分家國

束結一這們我於裂分家國

在岸他岸是

事近醉沈

升恩

奇傳親保港香女父醉

沈醉先生的來來去去

其及來由的名之醉沈

沈醉先生

沈醉先生

沈醉先生

沈醉先生

沈醉先生

沈醉先生

沈醉先生

沈醉先生

沈醉先生

沈醉先生

沈醉先生

沈醉先生

沈醉先生

沈醉先生

沈醉先生

沈醉先生

沈醉先生

沈醉先生

沈醉先生

沈醉先生

沈醉先生

沈醉先生

沈醉先生

沈醉先生

沈醉先生

沈醉先生

沈醉先生

沈醉先生

沈醉先生

沈醉先生

沈醉先生

沈醉先生

沈醉先生

沈醉先生

沈醉先生

沈醉先生

沈醉先生

沈醉先生

わが三十年

もと蔣介石集團戦犯の手記



沈醉先生

沈醉先生

其及來由的名之醉沈

わが三十年

——もと蔣介石集團戦犯の手記

沈 醉 著

北京・外文出版社
湖南人民出版社

わが三十年

1987年初版発行

著 者——沈 醉

訳 者——外文出版社日本語部

出版者——外文出版社・湖南人民出版社
(北京西城区百万莊路24号)

発行者——中国国際図書貿易総公司
(北京P・O・Box399)

印刷者——外 文 印 刷 廠

編号: (日) 11050—180

11—J—1964P

01080

出版にあたって

本書の著者は元蔣介石集團の高級特務である。かれは共產主義者と民主人士を迫害した「功績」により、二十八歳の若さで少将に昇級した。一九四九年十二月、人民解放軍が昆明に進駐する前夜、著者は国民党政府雲南省主席の盧漢に軟禁され、蜂起宣言のやむなきにいたったが、その後、戦犯として国民党高級将校の杜聿明らとともに拘禁された。一九六〇年十一月、特赦をうけ、全国政治協商會議文史資料研究委員会専門委員の仕事にたずさわっていたが、「文化大革命」のなかで、再び五年間、投獄された。

本書には、信頼できる資料（日記、詩を含めて）をもとにして、著者の三十年にわたる波瀾に富んだ経歴が詳細に生きいきと述べられている。反感の気持ちを抱いていた著者が、獄中の学習、労働を通じて、自分の過去の行動の間違っていたことをさとし、どのようにして立場を変え、自覚的に改造にとりくむようになったか。特赦後、昔の「仇敵」（自分が迫害し、逮捕したことのある人）と協力していく中で、一家離散の境遇から、いかにして新しい生活の楽しみを得るようになったか。「文化大革命」中、江青一味が自分を逮捕した目的をいかにして見破り、いかにしてそれと巧みに渡りあったか。また獄中で地下闘争にたずさわったことのある数人の老幹部といかにして固い友情を結ぶようになったのか。江青反革命集團が粉碎された後、香港へ行って、前妻や娘たちと会い、「苦海」から抜け出すようにという人びとのすすめを振りきって、なぜ再び北京へもどって来たのか。著者はつぎのように答える。「未だ途に迷わぬを喜び、なおよく返るを知る。苦海辺無し、敢えて再び跳ばず。頭を回らせば岸有り、岸は北京に在り」と

本書は戦犯の生活の一部を通じて、中国大陸三十年の政治の動きをうつしだしている。これは、中国の政治を理解し、戦犯改造についての中国共産党の政策を研究する上で、価値ある書と言えよう。

目次

はじめに／1

第一章 拘留以前／5

第二章 昆明刑務所／23

第三章 重慶でのトラブル／49

第四章 悔悟の芽生え／73

第五章 再び疑う／91

第六章 鉄窓の思い出／107

第七章 農場での労働／135

第八章 喜びと悲しみと／155

第九章 特赦に浴す／175

第十章 新しい門出／189

第十一章 家を思う切々の情／207

第十二章 末娘の上京／225

第十三章 世間は狭い／245

第十四章 和解／267

第十五章 江南有感／289

第十六章 西北の旅／309

第十七章 不吉な兆し／325

第十八章 溥儀の死／335

第十九章 資料書きに明け暮れる／343

第二十章 二度目の監獄入り／351

第二十一章 忘れ難い獄中の友／375

第二十二章 長い一日／393

第二十三章 山河ともに悲しむ／403

第二十四章 中国は救われた／421

第二十五章 肉親を訪ねて香港へ／441

第二十六章 岸は北京に在り／461

エピローグ／493

付 録

一 唐山行／509

二 長城に到らざれば好漢に非ず／521

三 鶴の里・チチハル行／531

はじめに

一九八〇年十二月十八日の夕方のことだった。勢いこんで帰ってきた娘が、門をくぐるなり、大きな声でわたしを呼んだ。

「パパ、パパ。たいへん、なんだと思う？ とってもいいことよ。……でも、驚いちゃだめよ」娘は、わたしに心臓病があつて、腹をたてたり、興奮したりしてはいけなことを知っているのだ。

「何だい、大きな声で。大丈夫だよ、パパは驚きやしないから言つてごらん」娘は後ろにまわしていた手を、わたしの目の前にひらひらさせた。くすんだ青色のカードが二枚、その手にあつた。

「ね、これ何でしょう？」

「あつ、通行証だ」

カードには「香港・澳門通行証」という字がはっきり印刷してあつた。わたしと娘は家族に会いに香港に行きたいと申請していた。そうか、政府は許可してくれたのだ。胸にうずくものを感じ、わたしは思わず目頭をおさえた。

夢ではないだろうか。もう三十年にもなる。川は来る日も来る日も流れつづけ、思いは夜毎に夢にあらわれる。国境の向こうにいる家族を思わない日が、一日としてあっただろうか。いつも夢の中であっていた家族たち。過ぎ去った日のことが、突然よみがえってきた。

あれはたしか一九四九年十月のことであった。蔣介石は、台湾へ逃げだす前に、わたしに特別の命令をくださった。「足元をかため、雲南を守りぬけ」というのである。さらに「功成らずんば、則ち仁を成す」の決意をわたしに示させるために、家族を一人残らず飛行機で香港に送りだすよう命じた。

出発の時になっても、髪は白くなっていた母は飛行機に乗ろうとしなかった。わたしと一緒に残ると言って泣く母を、わたしは抱きかかえて飛行機にのせるしかなかった。年若く、柔順だった妻はわたしにすがりつき、しゃくりあげるばかりだった。無邪気な子供たちは飛行機に乗るのだとはしやぎまわっていたが、わたしが一人一人抱きあげて飛行機に乗せるだけで、一緒に行こうとしないのを見ると、わたしの首にぶらさがり、「パパ、すぐ来てね」と甘えて言うのだった。

あれから三十有余年、老いた母はもう居ない。娘たちはみな成人し、それぞれ一家をなしている。妻はどうにもなくなつて再婚した。それにしても、肉親のきずな、夫婦の情は過ぎ去ったからといって、忘れられるものではない。いつか会うことができたなら、夫として、父親とし

て、なすべきことをなし得なかった罪をわび、許しを請いたいものと念願していた。だが、罪と言え、わたしは人民にこそ、罪を責められてしかるべき人間なのである。それが香港行きを許されるとは、それも大陸にいるただ一人の娘と一緒にに行けるとは、わたしにはとても信じられなかった。自分の目がどうかしたのではないのかとさえ思った。

けれど、二枚の「香港・澳門通行証」は、それが夢ではないことをはっきり告げていた。突然の喜びが、ゆっくりとわたしの胸深くしみわたっていった。

十二月二十三日、わたしはついに娘とともに香港の土を踏み、多くの親戚や友人たちに会った。アメリカに住んでいる娘も、カナダにいる甥も香港にやってきた。台湾にいる子供だけが来られなかったが、これが今度の香港行きで一番残念なことであった。

かれらにどんなに会いたかったことだろう。一日でも長く一緒に居られたらと、どんなに思ったことだろう！ 大金を贈呈するから、香港に留まるようにとすすめてくれる友人もいた。手続きをとってやるから、台湾へ行くようにとすすめてくれる友人もいた。かれらは言った。

『苦海^{かざい}無^むし、頭^{こうべ}を回^{めぐ}らせば、是れ岸なり』というじゃないか、何でこのチャンスに逃げださないんだ』と。

親しい友人の好意ではあったが、わたしには受け入れることができず、婉曲に断った。香港の

一九八一年一月二十九日付け『新晩報』は、「……東西両方に通じるこの十字路にやってきたにもかかわらず、かれは少しもためらわなかった。帰ると言ったら、そのとおりに帰っていった。春節前に帰ると言ったら、そのとおりに春節を前にして帰って行った」と、わたしの決意を報道している。友人たちはわたしの気持ちが無理解で言ったものである。

「昔はあんなに頭がよくて、やり手だったのに、どうしたんだ。ぼけてしまったのではないか。生きて出てこられるなんて、滅多にあることじゃない。考えてもみたまえ。この三十何年、きみはどうやって生きてきたんだ。大陸になんの未練があるというんだ」

まったくその通りだ。この三十何年、わたしは何という曲折の多い道を経してきたことだろう。わたしがどうやって生きてきたのか？ これは確かに、振り返ってみるに値する問題である。それは、わたし自身にたいする回答であるばかりでなく、海外にいる肉親、友人への回答であり、わたしの経歴に興味をもつ読者への回答でもあるのだ。

第一章 拘留以前

話は長くなるが、やはり一九四九年の時から始めなければならない。

当時、わたしは国民党政府の国防部雲南区駐在專員をつとめ、それに国防部保密局①雲南省站站长を兼ねていた。この年の夏から秋にかけて、雲南にある国民党中央の軍・政府機構を全部追いだそうとする現地人民の運動がぼつ発した時、蔣介石と保密局局长・毛人鳳は、保密局の雲南站と交通部の交通警察総隊（保密局が握っていた特務武装部隊）を雲南から撤退させ、四川で待機させることに同意せざるを得なかった。しかし、わたしに、国民党国防部雲南区駐在專員の名目で、雲南省主席の盧漢と連絡を保ち、雲南駐在の第二十六軍団および第八軍団との協力を強化するよう、命令した。雲南をその手中に握りつづけるためである。

わたしは、身分の暴露された雲南站の特務たちを副站長の皮紹晋にひきいらせて重慶へ行かせ、まだ身分の知られていないものばかりをあとに残した。無電連絡用の雲南無線電信支局も一緒に

① 保密局の前身は国民党軍事委員会調査統計局、略称「軍統」で、一九四六年後半に国防部保密局と改められた。この軍統と国民党中央執行委員会調査統計局、略称「中統」が国民党の二大特務組織であった。

撤退させたので、わたしの家の階下にしつらえた小型通信機だけが軽うじて台湾、重慶との通信連絡を保ち続けていた。その頃、わたしの家族は、妻も子も母もみな昆明から重慶に移っていたので、わが家は保密局雲南駅の指揮部になった。

「九・九事件」①の後、毛人鳳は昆明にやってくると、わたしの家にひと月ちょっと住み、わたしを相手に、雲南支配の画策に明け暮れていた。いよいよ雲南駅の再建が決定すると、毛人鳳はわたしが雲南駅の特務活動をうまく協力してやれるように、盧漢のところから雲南綏靖公署保防処の肩書を貰ってきてくれた。

それからしばらくして、蔣経国と蔣介石が別々に昆明にやってきて、雲南にしっかりと足場をきずいて、直接、国外と連絡をとり、援助を求めるための唯一の反攻戦略要地雲南を全力をあげて確保せよ、と命令した。

一九四九年十二月の初め、人民解放軍が破竹の勢いで、西南めがけておしよせてきた。成都の陥落は旦夕に迫り、雲南、貴州などの解放も真近という状態だった。盧漢が解放軍側に寝返ろうとして、ひそかに準備しているという情報は、かなり前からわたしの耳に入っていた。盧漢をす

① 九九事件とは、一九四九年九月九日に、保密局が昆明で、革命家を大量逮捕した事件のことで、このとき逮捕された革命人士と愛国青年は五百人近くにも達した。

ぐ殺れという毛人鳳の命令がなかったので、わたしは無電で毛人鳳に状態を報告し、指示を仰いだ。時局が緊迫しており、盧漢を殺せば雲南の民衆の間に、いっそう大きな反抗をひきおこすと思ったのだろう、毛人鳳はさっぱり命令を下さず、盧漢を厳重に監視せよ、というばかりだった。

十二月六日、わたしは自ら盧漢をたずね、探りを入れてみた。昆明で、一度、捜査・逮捕を大がかりにやる必要があるし、解放軍が昆明に攻めこんでくる前に、発電所や軍事工場などの大工場、大鉱山の爆破準備もしておかなければならない、と切り出した。盧漢はわたしの話をきき、首を振って、

「今のこの緊迫した状況の下で、そんなことをするわけにはいかない。騒動がおきたらどうにもならん」

と答えた。わたしはどうも情況がおもしろくないことを感じとり、いても立ってもいられない気持ちだった。

九日の午後、西南軍政長官公署第二処処長の徐遠挙、保密局総務処処長の成希超、經理処処長の郭旭の三人が同じ飛行機で、成都から昆明に飛んできた。その頃、成都はいよいよ危なくなっていたので、予想外の事件の起きるのを避けるため、成都の飛行機は直接、台湾には飛ばない

のだった。台湾に行くには、先ず昆明に飛び、そこで飛行機を乗りかえなければならなかった。

徐遠挙と成希超は重慶で、大虐殺、大破壊の任務を遂行したあとなので、急いで台湾へ飛びたかったのである。郭旭は金の延べ棒をつめた手さげカバンを一つ持っていた。これは保密局の経費にあてゐるものだったが、かれもすぐにでも台湾へ行きたいとあせっていた。三人とも昆明に着くと、台湾行きの飛行機をすぐ手配してくれとわたしにたのんだ。この三人を追いかけるようにして、重慶衛戍総司令部保防処長の周養浩も、別の飛行機で、昆明にやってきた。来るなり、空港からわたしに電話をよこし、やはり台湾行きの飛行機を何とかしてくれと頼んできた。周養浩のおびえぶりは徐遠挙たちよりいっそうひどく、いまにも昆明に時局の変化が発生するのではないかと恐れ、わたしの家にさえ来ようとしなかった。ところが、その時、わたしはすでに、一つの情報を入手していた。それはよそから来た飛行機は着陸させるが、昆明の飛行機は飛行を禁止すると、盧漢が命令したというものである。わたしは徐遠挙たちを落ち着かせるために、次の日の朝、台湾行きの飛行機を手配するからと答えておいた。

つづいて、徐遠挙たちに夕食を食べさせ、風呂に連れていった。盧漢がいつ反旗をひるがえすかわからないといった状態だったので、わたしはその時、たいへん緊張していた。徐遠挙がわたしの不安を見抜いたので、わたしは仕方なくありのままを告げた。すると徐遠挙は、

「張群が昆明に來ているから、いまのところ、盧漢も手がでないだろう」

と安心させるように言った。そうかも知れない、とわたしも思った。西南軍政長官公署の長官である張群は盧漢の上級というだけでなく、蔣介石の前で、盧漢をかばったことさえあるのだ。それに、二人は個人的にも親しかった。張群は知恵袋と言われている国民党の元老である。かれならば盧漢を説得できるかも知れない。

郭旭と成希超を「皇后飯店」に宿をとらせ、徐遠挙を盧漢の副官処長朱家材の家に送ろうとしていた時である。伝令兵が、盧漢の家で夜十時から會議をするので、出席するように、という張群の通知をとどけてきた。行こうか行くまいか、通知を受けて、わたしは迷ってしまった。保密局の系統という点からいえば、わたしは張群の下にいるわけではないから、行かなくても構わないが、保防処の系統となれば、これは行かないわけにはいかない。

「ちょっと見てくれないか。この印鑑は張群がいつも使っているやつかな？」

わたしは不安でたまらず、徐遠挙にたずねた。徐遠挙は通知に押してある判をじっと見ていたが、すぐに、

「間違いない。張群のだよ」

と保証した。しかし、それでもわたしは行く気になれなかったが、徐遠挙は行った方がいいだ

ろうとすすめるのだった。

「張群が来たのは、きつと何か具体的な方策があつてのことだろう。やっぱり行って、張群がどういう考えか、聞いておいた方がいいんじゃないか」

徐遠挙のことばに、それもそうだと思い、行くことにはしたが、だからといって、不安が少しでも消えたわけではなかった。

念には念をと思つて、わたしは綏靖公署の何人かの処長に電話をかけ、会議の通知を受けとつたかどうかたずねてみた。ところが、誰一人として受けとっていない。それで、一体どういうことなのか、直接、張群にたずねてみようと思ひ、盧漢の家に電話をかけ、張群を電話口に出してもらふように頼んだ。電話口から聞こえてきたのは、

「張長官はたいへんお忙しいので、用事があるなら、時間通り會議に参加し、直接、長官にお話してください」

という返事であつた。これはいかん、行つたらもう帰つて来られないだろう。わたしは事態が最悪の状態になつてゐることをひしひしと感じた。だが、事ここに至つては、行かないわけにもいかなかった。

万一をおもんばかつて、わたしは台湾に最後の電報を打ち、「時局挽回ノ余地ナキニ至レリ。